日本医史学雑誌第五十三巻第三号　平成十八年十月二十六日受付
平成十九年　九月二十日発行　平成十九年四月　八日受理

本邦牛痘種痘法の鼻祖　中川五郎次研究の歩み（下）
――（6）平成時代――

松木明知
弘前大学医学部麻酔科

〔要旨〕中川五郎次の本格的研究は、一八八五年小貫庸徳が松前地方で実地調査して詳細な報告を行ったことに始まる。以来中川の事績が徐々に知られるようになった。函館市の小児科医阿部龍夫は一九四三年に「中川五郎治と種痘伝来」を上梓したが、中川研究において大きな進歩であった。

一九六〇年代初め、順天堂大学の村山七郎は中川がシベリアから将来したロシア語種痘書を特定して翻訳した。この頃著者（松木）は馬場貞由がこの種痘書を一八二〇年に翻訳した「遁花秘訣」の各種写本の書誌学的研究を行ない、同時に中川家、小針屋家の墓碑などを実地に調査して、彼の埋葬地を特定した。最近の知見として著者は中川に関するすべての史料を網羅した「北海道医事文化料集成」全三巻を発行して研究者の便を図った。

過去一二〇年間、中川に関する多くの論考が発表されたが、それらの殆どで誤った文献を引用されて重大な誤りが踏襲されている。

キーワード――中川五郎次　小貫庸徳　村山七郎　遁花秘訣　北海道医事文化史料集成

6 平成時代（一九八九年一月～二〇〇六年一〇月）

一九八九年（平成元）東邦大学医学部免疫学研究室の木村一郎教授は「わ[113]が国で最初に種痘をした中川五郎治の牛痘苗入手についての一考察」を発表した。この論考は一次史料に当たらず、信用を置くことが出来ない論文から孫引きして書いた典型例である。また史料として吉村昭の「北[97]天の星」を挙げている。小説は史料とならないし、すべきでない。日野鼎斎が五郎次に痘苗の分与を依頼したとあるが、そのような事実は証明されてない。最後に木村は「これは彼、またはその関係者が痘苗入手のため、国禁を侵して国外に出たことが分与によってばれるのを恐れたためと考えれば、牛痘苗の入手先がシベリアであったことが推論できよう。」と結んでいる。当時の北辺の事情を考慮すれば、木村の推論など全く成立しない。当時の北辺の大勢を考慮に入れない悪例である。

一九九〇年（平成二）に著者は「北[114]海[115]道医事文化史料集成（上巻、下巻計一〇一四頁）」を編集上梓した。主として中川五郎次に関する史料を写真版、ないしは活字化覆刻したもので、上巻には「中川五郎治関係文書」、「御申上荒増（扣）」、「異境雑話」、「五郎次話」、「五郎治招状」、「白鳥雄蔵種痘之書」、「中川五郎治種痘文書」、「中川五郎治と種痘伝来」、「遁花秘訣（京都大学富士川本）」を収め、下巻には「魯西亜牛痘全書（嘉永三年版）」、「遁花秘訣」原書の和訳（村山七郎訳）、「遁花秘訣」原書（一八〇三年版）、「遁花秘訣」原書（一八〇五年版）中川五郎治研究文献目録、「魯西亜漂流聞書」などを収載した。さらに翌一九九一年（平成三）には「北[116]海道医事文化史料集成（続、五九二頁）」を出版した。上下巻に収載出来なかった「陥北聞見録」、「有北紀聞」、「魯西亜傳牛痘種法之記」、「北海道種痘ノ濫觴」など種痘関係の史料一七篇を収めてある。これら三冊の史料集は中川五郎次研究の基礎史料であり、これを無視しては最早五郎次の研究は成り立たないと云っても過言ではない。

一方この頃、一九九〇年（平成二）から九五年（平成七）には取り上げるべき論文は少ない。杉[117]本[119]は三冊の著書

の中で「遁花秘訣」に言及しているが、その原書を相変わらずジェンナーの著書のロシア語訳と誤解している。鈴[120]木喜代作は主として「御申上荒増」を参考にして五郎次の生涯を小学生向けに分かり易く解説した。このような試みも評価されるべきであろう。

一九九四年（平成六）北海道大学の秋月俊幸は「北[121]方史史料集成」の第五巻に「五郎治申上荒増（御申上荒増）」を活字化覆刻し、解説を執筆した。底本に用いたのは市立函館図書館蔵の写本である。前述したように著者はこれより四年前の一九九〇年（平成二）に「北[114]海道医事文化史料集成（上）」に内閣本を活字化覆刻したが、秋月はこのことに一言も触れていない。著者は北海道大学図書館北方史料室とは頻繁に連絡を取り、著書を寄贈していたので、秋月がこれを知らない筈はない。無視する理由があるのだろうか。

一九九五年（平成七）中尾英雄は「江[122]戸の疱瘡医―池田京水とその一族」を著したが、五郎次に関しては附録のなかで「種痘の先覚者　中川五郎治」をしている。参考文献を示していないが、五郎次が帰国時痘苗と種痘針を持ち帰ったとか、種痘された人数を「二千人」としているところを見れば、吉村の文章を参考にしたのであろう。小説は史料にならない。

翌一九九六年（平成八）左近毅と河合忠信は天理図書館の「楽[123]亭（松平定信）文庫」中に「異境雑話」の新写本「魯西亜噺本」を発見し、活字化覆刻した。市立函館図書館蔵の写本で省略された図も描かれ、省略された文章も復元されていることから、より完璧に近い写本と考えられた。しかし左近らは当初、これが「異境雑話」であることを認識せず、筆者を大黒屋光太夫と一緒に帰国した神昌丸の磯吉と推定した。

この誤りは左近らが本文を十分に吟味しなかったために生じたと推察される。九五頁上段にこの写本の著者がイルクーツクへ行き、それから「申年五月下旬頃ヲホツカヘ立帰」ったとある。イルクーツクへ行ったことがあり、「申年」つまり一八一二年（文化九）にオホーツクに帰った人物は中川五郎次ただ一人である。このことからも本

写本の著者は中川五郎次と直ちに特定することが可能であるのに、それが出来なかった左近らは迂闊であったといわざるを得ない。左近らは後でこのことに気が付き、本書を正しく中川五郎次の「異境雑話」の新写本としたが、いずれにせよ一九七六年（昭和五一）に加藤九祚[99]が一層完璧な「異境雑話」の写本の発掘とその活字化が望ましいと述べたことが実現された。

一九九六年（平成八）大島幹雄は「魯西亜から来た日本人―漂流民善六物語―」[124]を著した。五郎次がイルクーツク州知事テレスキンの命令によって召喚され同地に滞在したのは一八一一年（文化八）の暮から翌一八一二年（文化九）二月の上旬までであったが、その時は善六の家に逗留した。善六は石巻の若宮丸の水主であったが、一七九三年（寛政五）一一月に時化に遭い、アリュウシャン列島に漂着した。それから善六らはオホーツク、イルクーツクで生活したが、善六は一七九六年（寛政八）に帰化した。この関係で大島は五郎次に言及しているが、格別の新知見は提供されていない。著者（松木）も一九九三年（平成五）にイルクーツクを訪れて、関係者を通じてイルクーツク大学、市立図書館に五郎次の史料を求めたが、徒労に終わった。

一九九七年（平成九）著者（松木）は「魯西亜牛痘全書」[125]の発行に至たる経緯について、詳細な論考を発表した。「遁花秘訣」が翻訳されるに到った経過、このことに関する杉本つとむ[117-119]の論考に対する疑義、著者（松木）が所蔵している嘉永三年版と安政二年版の「魯西亜牛痘全書」の比較について述べ、「魯西亜牛痘全書」の初版は一八五〇年（嘉永三）に発行されたことを論証した。本論文によってこの問題に決着が着いたと思う。

一九九八年（平成一〇）著者は第九九回日本医史学会（学術大会）を函館市において主催した。この年が中川五郎次没後一五〇年、そしてジェンナーが牛痘種痘法の著書を出版してから二〇〇年になることから、学会の主題を「北方系の種痘法」として、ジェンナーの種痘法に関連して外国から二名の特別講演者をお招きした。残念ながら特別講演者の一人カナダ・アルバータ大学のジョン・マッキンタイヤー名誉教授は来日直前交通事故で急逝したの

で、著者が生前預かっていた原稿を代読した。この学会で著者は会長として「牛痘種痘法の鼻祖中川五郎治に関して誤って伝えられていること」[126]と題して講演した。少なくとも日本の医学の通史において中川五郎次について言及する際、著者のこの報告は必須であろう。医学史研究者も先行する研究を十分に把握理解して論文を執筆して戴きたいものである。著者は学会の主催を記念して「中川五郎治書誌」[127]を上梓したが、これは後続の研究者に益するよう配慮したものであった。この著作に対して第一〇回日本医史学会矢数医史学賞が授与された。

一九九九年（平成一一）には重要な論文が三篇発表された。一は大阪市立大学の左近による「日本人のシベリア認識―「五郎治申上荒増」をめぐって」[128]と題する論考である。この論文の本旨は「五郎治申上荒増」の現代語訳にあるが、その前文において五郎次の略歴と「異境雑話」について解説がされている。五郎次の経歴については諸書を参照にしているものの、不確かな記述が多い。例えば五郎次が「廻船問屋小針屋」に生まれたとか、一八〇一年（享和元）にエトロフ島の会所の稼ぎ方になったとか、「龍泉寺」に墓があるとか、ジェンナーの種痘書のロシア語訳を二冊将来したとかである。いずれも誤りか不確かである。彼らが新写本「魯西亜噺本」を発見したものの、一九九六年（平成八）に発表した論文[123]ではこの写本が「異境雑話」であることを知らず、原著者についても誤った推定をしていた。この論文では正しく「異境雑話」であるとされ、五郎次自身による写本により近いとした。「異境雑話」が大黒屋光太夫の「北槎聞略」に劣らぬ史料であるという評価については賛意を表する。左近は本稿で「五郎治申上荒増」を現代語に翻訳しているが、中途半端で終わっている。紙数の関係であるという。これはおかしな話で、紙数の関係だけであれば二回に分けるなどして完全なテキストを読者に提供すべきであろう。

二は谷沢尚一の「中川五郎次の晩年」[129]と題する論文である。北方史の第一人者の論文だけあって史料を博捜して論述している。特に五郎次の名前について時代別に明らかにしたことは大きな進歩といえよう。しかし新史料として提示した一八四二年（天保一三）の借用証文の筆跡を五郎次本人のものと見做している点には賛意を表すること

は出来ない。書道の専門家の意見を求めたが、筆勢は七十三歳の人物の字とは考えられないとのことであった。

三は著者による論文である。「続々日本の医史跡二〇選」に「北[130]海道松前郡中川五郎治顕彰の碑」と題して執筆した。前述したように一九九八年（平成一〇）著者は函館市において第九九回日本医史学会を主催した。五郎次の活躍した松前で開催しても良いかとも考えたが、交通の便を考慮して函館市で行った。学会を開催することを記念して、松前町に中川五郎次の顕彰碑を建立することを計画した。松前町教育委員会とも密に連絡を取り、また多大な協力も得て公園に一角に「中川五郎治顕彰の碑」を建立し、学会の前日、一九九八年（平成一〇）五月一六日にイギリス・ジェンナー博物館館長マルコム・ビーソン博士、松前町長などの参列を得て序幕式が盛大に行われた。論文にはこの式典に至る経緯と、従来諸書によって流布している五郎次に関する誤った情報を指摘して訂正した。そして誤った情報がマスコミによって無批判に流されることも指摘した。

この年、北海道古文書解読サークルは道立文書館所蔵の「五[131]郎治申上荒増（全）」を解読し注釈を付して「古文書叢書一」として発行した。このグループは北海道史の重要な古文書をテキストに解読の勉強会を開催し、その成果を出版したが、その第一冊目に「五郎治申上荒増」を取り上げた。著者[114]（松木）は内閣文庫本を覆刻し、秋[121]月俊幸は函館本を覆刻しているので、これでいわゆる「五郎治申上荒増（御申上荒増）」の主要な写本は活字化覆刻されたことになる。

二〇〇〇年（平成一二）著[132]者は村山七郎訳の「遁花秘訣」の訂正を行った。村山が一八〇三年（享和三）に発行されたペテルブルグ版原書の現代語訳を発表したのは一九六六年（昭和四一）であった。以来著者はこの村山訳を活用してきたが、原書と比較して見ると誤訳や語句の脱落が少なからず見出された。著者は一九九〇年（平成二）に「北[114]海道[115]医事文化史料集成」を上梓したが、その下巻に村山の現代語訳を収載することにした。この時村山に現代語訳に誤訳と語句の脱落があることを伝え、訂正方をお願いしたが、高齢と多忙のため訂正は不可能であり、著

者にその業を託された。一九八九年（平成元）に著者が弘前大学医学部麻酔科学教室の教授に就任したこともあって、この作業はしばらく放置されていた。そして漸くハバロフスクの極東医科大学アレキサンドル・ケリムスキー教授やロシア語研究者の協力を得て、誤りの訂正と脱落の補充をすることが出来た。著者により村山教授の誤りが訂正されて、ほぼ正確な「遁花秘訣」の原書の現代語訳が研究者に提供出来たのは馬場貞由の訳稿が完成してから実に一八〇年振りである。

この年研究者の倫理に大きく違反する論文が発表された。その論文の筆者は北海道大学医学部耳鼻咽喉科の名誉教授犬山征夫である。彼は「種痘[133]を開発したジェンナーとわが国で初めて種痘を行った中川五郎治」において、誤って中川五郎次の肖像なるものを掲げているが、図6「中川家の家系図」、図8「遁花秘訣」ロシア語原書（モスクワ版、一八〇五）と「遁花秘訣」写本武田本C（右）、図9「遁花秘訣」の写本の一部（左）と種痘図（一八〇五年版）第一一～一六日（右）は著者（松木）の著書からの無断引用である。本文においても「V・中川五郎治の生い立ち」の記述も殆ど著者（松木）の著書を要約したものに過ぎないが、文末の「文献」には著者の論文は一つも示されていない。医育機関、それもいわゆる旧帝大の一つである北海道大学名誉教授がこのような研究者としての倫理に大きく違反する行為を行ったことは誠に遺憾であり、その経歴に消去出来ない汚点を残したことを反省すべきである。

二〇〇一～二年（平成一三～四）にかけては著者以外による数篇の論文が披見されるが、特記すべきものはない。著者[134]は中川五郎次がシベリアから将来した二冊のロシア語種痘書の内、未だ確定されていない一冊についての考察を行い、その可能性の高い一冊について現代語に訳して発表した。五郎次研究上、些かの進歩ではなかったかと思う。

二〇〇三年（平成一五）吉村昭は「歴史の影絵[135]」を文春文庫の一冊として著したが、その中に「種痘伝来記」が

収載されている。当然五郎次に言及されているが、記述は吉村がそれまでに書いた以上のものではない。この年切田未良は「過去帳―永遠に生きている名の発見」[136]を発行したが、一九七九年（昭和五四）に上梓した「私[104]の見た佛たち―過去帳を訪ねて―」の改訂版である。繰り返して述べるが、彼女が実際に中川五郎次の墓を調査していないことは墓の寸法を誤っており、墓の写真も著者の著書から無断で転載したことは墓の手前に移っている雑草の位置と長さで証明される。泉[137]秀樹は私学共済の広報誌「レター」に「種痘の種を蒔く」と題して中川五郎次の生涯を記した。一般の人にも分かり易く記した点は評価できるが、「児玉嘉内」を「小玉嘉内」、「大村治五平」を「木村治五平」など誤っている点が気になる。

胡[138]谷（えびすだに）真は「天然痘のワクチンをロシアから伝えた漂流民の久蔵」の生涯を簡単に記した。直接五郎次に言及していないが、オホーツクで生活を共にした久蔵であり、彼が種痘法への関心を持ったのも五郎次の示唆であることから、ここで取り上げた。

二〇〇五年（平成一七）七月一九日、日本学術会議第七部の夏部会が函館市の北海道大学水産学部講堂で開催された。著者は第七部会員として「シ[139]ベリアで牛痘種痘術を学んだ中川五郎治の数奇な運命」と題する特別講演を行った。日本における江戸時代以前の文化の伝播を通観すると、中国大陸、朝鮮半島からまず九州地方に入って、それから中国・四国地方、関東地方へと向かうのが常であった。これは日本が東アジア大陸の東端に位置するという地理的理由にもよるが、中国・朝鮮半島の人達が高い文化を持っていたからである。これは日本の文化伝播における東漸北上の原則とも云えよう。

しかしこの原則に反する事例が二つだけ存在する。一つはシベリア経由の種痘法の伝来であり、もう一つは津軽地方の阿片の生産である。前者のシベリア経由種痘法の伝来とは、もちろん五郎次が将来したものである。五郎次の系譜、生涯、シベリアから将来したロシア語の種痘書、種痘の実施などについて簡潔に述べ、最後に著者が松前

町の協力を得て松前公園に中川五郎次の顕彰碑を建立し、さらに二〇〇四年九月に五郎次の生まれた南部川内村（現青森県下北郡むつ市川内町）に「中川五郎治生誕之碑」が建立されたことに言及した。

片倉正晴は「続[140]々日本のなかのロシア」の中で中川五郎次について執筆したが、記述は短文ながら概ね正しい。函館市高龍寺の中川家の墓碑、「遁花秘訣」のロシア語原書、松前町の「中川五郎治顕彰の碑」、川内町の「中川五郎治生誕之碑」の写真を示して判りやすい。このような一般向けの文章も大切であり評価したい。ただしロシア語原書は一八〇三年のペテルブルグ版を示すべきであり、五郎次は「植え疱瘡を職業としてその報酬で暮らした」とあるのは誤りである。改訂して欲しいものである。

札幌のＳＴＶラジオは「ほっかいどう百年物語[141]」（第六集）を出版した。一三四頁から一四五頁までは中川五郎次について述べられている。一般の人も気軽に読めるように分かり易く書いた努力は認めるが、だからと言って誤ったことを書き、不確かなことをあたかも事実であったかのように記すのは間違いである。この短い一二頁の文章に些細な点も含めると十数か所の誤りがある。第一に五郎次の肖像なるものを掲げているのは大きな間違いである。五郎次が蝦夷地へ渡ったのは「一二歳」としているが、その証拠はない。両親も松前に渡ったとあるが、これも誤りである。指摘すれば際限がない。このような誤りは先行する研究を全く無視したために生じたのであり、たとえ一般人向けに書いたとしても、執筆者は先行研究を十分に咀嚼理解して欲しいものである。

以上平成時代の研究を概説したが、この期においては著者による中川五郎次に関する殆どすべての根本史料が覆刻されたことが特筆され、それらを纏めて書誌を発行したことも研究を大きく進展させたと考えられる。左近らによって「異境雑話」のほぼ完全な写本が発見されたことも注目すべきである。しかし一般人向けの解説書や啓蒙書の大半において、新しい研究が何ら参考にされずに、重大な過ちが繰り返されていることは深刻な問題であろう。

参考文献

（1）吉村　昭「万年筆の旅」（作家ノートⅡ）（文春文庫）文芸春秋社、一九八六年（昭和五一）二六一頁

（2）中川五郎次の自筆ではないが、一八〇七年（文化四）五月一八日付の菊地惣内宛書簡の写しは中川の名前に関しての信拠すべき最も古い史料である。これには「五郎次」とあることによって、彼自身は当時「五郎次」と記したことが判る。

（3）松木明知編『北海道医事文化史料集成（続）』二四～二四九頁、岩波ブックサービスセンター、東京、一九九一

（4）文献3の二四五～二四九頁

（5）平出鏗二郎「種痘術の創意」『史学雑誌』第五編　第二号、五九～六八頁、一八九四

（6）菊地武文「文政年間ノ種痘家」『東京医事新誌』二二七号、一二～一四頁、一八八二

（7）小貫庸徳「北海道種痘ノ濫觴」『函館新聞』一二一三号、一八八五年四月二四日

（8）「北海道種痘ノ濫觴」『官報』一一九八号、一八八七年（明治二〇）六月二八日

（9）函館県「北海道種痘ノ濫觴並択捉島番人　五郎治事績」『函館県衛生課第一回年報』（明治一五年度）七七～七九丁、一八八三年一一月

（10）阿部龍夫『中川五郎治と種痘伝来』無風帯社、函館市、一九四三

（11）函館市中央図書館蔵

（12）村尾元長『北海道史談』（訂正再版）一八～一九頁、集英堂、東京、一八九六

（13）富士川游「種痘術の祖の私考」『中外医事新報』二二八号、四九二～四九六頁、一八九四

（14）富士川游「疱瘡の話　附種痘の由来」『風俗画報』九一号、一四～一七頁、一八九五

（15）西宮藤毅（にしのみやとうき）「秋田種痘の沿革」『秋田魁新報』一九〇八年、三月二日、三日

（16）北海道庁『北海道拓殖功労者旌彰録』五七三～五七四頁　北海道庁、札幌市、一九一九

（17）高橋理一郎編『北海道拓殖功労者旌彰録』三九三頁、地方振興事績調査会、札幌市、一九二一

（18）河野常吉『北海道史　第一』北海道庁、札幌市、一九一八年、九五二―九五三頁

（19）河野常吉『北海道人名字彙（下）』一六七～一六九頁、北海道出版企画センター、札幌市、一九七九

（20）河野常吉「本邦種痘鼻祖中川五郎次の事績」『北海医報』第六四号、四二～四八頁、一九二五

（21）関場不二彦「中川五郎治（「治」一に「次」に作る）が種痘事蹟附戦蝦夷地に於ける種痘概略（序文二章）」『北海医報』

六五号、一八～二七頁、一九二五
(22) 関場不二彦「蝦夷地の種痘は本邦に先んず・中川五郎治」『蝦夷往来』第一〇号、一二六～一三四頁、一九三三
(23) 笹沢魯羊『大畑町誌（改訂五版）』一七九～一八二頁、下北郷土会、大畑町、一九六三
(24) 岡田健藏『函館市功労者小伝』、八頁、函館市、一九三五
(25) 阿部龍夫「中川五郎治種痘伝来の事」山脇正次編『市立函館病院要覧』六～一八頁、市立函館病院、函館市、一九三五
(26) 阿部龍夫「秋田最初の種痘（上・下）」『秋田魁新報』一九三六年三月二七日、二八日
(27) 加藤蓼洲「秋田藩最初の種痘医（一）～（四）」『秋田魁新報』一九三六年四月七日～一〇日
(28) 加藤蓼洲「北秋地方に貞庵の足蹟を探る」『秋北新聞』一九三六年四月一九日
(29) 阿部龍夫「本邦最初の牛痘接種」『医界展望』八〇号、一七～一八頁、一九三六
(30) 加藤蓼洲「秋田藩最初の種痘医」『医界展望』八七号、一九頁、一九三六
(31) 深味三郎「秋田藩牛種痘の来歴」『秋田医事衛生誌』一〇六号、二二～二四頁、一九三六
(32) 高橋信吉『蝦夷痘黴史考』南江堂、東京、一九三六
(33) 阿部龍夫「牛痘接種南漸史考」『兒科診療』三巻一号、六六～七三頁、一九三七
(34) 加藤蓼洲「秋田医事衛生紙掲載　秋田藩牛痘種痘の来歴に就き深味三郎に問ふ（上・下）」『秋田魁新報』一九三七年三月三日、四日
(35) 高田不二夫「捕はれた五郎治」『北海道倶楽部』四巻一号、八〇～八四頁、二号、五〇～五四頁、三号、四七～五五頁、四号、四八～五二頁、一九三七
(36) 中野　操「日本牛痘濫觴史譚」『日新治療』二三五号、四〇～四四頁、一九三七
(37) 高橋信吉「再び我国最初の様式種痘法に就て」『皮膚と泌尿』五巻一号、五三～六〇頁、一九三七
(38) 中野　操「牛痘日本移入考（上・中・下）」『日本医事新報』八一六号、一五一九～一五二一頁、八一七号、一五九八～一六〇〇頁、八一八号、一六八六～一六九〇頁、一九三八
(39) 神山（こうやま）茂「初めて種痘を将した五郎治（一～一九）」『函館の小学生』、一九三～二一六号、一九四〇～一九四二
(40) 神山　茂「五郎治」『風鐸』一巻二輯、一六～三三頁、一九四〇

(41) 鈴木三郎『日本種痘はじめ（少国民文芸選）』帝国教育会出版部、東京、一九四二
(42) 大麻刈根「秋田藩文化史研究 ―種痘の咄―（上、下）」『秋田魁新報』一九四三年二月二五日、二六日
(43) 松本　隆「中川五郎治ノ事歴」『月刊叢書』第二号（孔版）、一九四八
(44) 阿部龍夫『函館の医事と医人』四～二〇頁、無風帯社、函館市、一九五一
(45) 吉成直太郎「佐竹藩の医薬史の研究（其の四）」『秋田県医師会雑誌』五巻二号、一四〇～一五一頁、一九五三
(46) 中里竜瑛「日本に於ける種痘伝来最初の北海道（上・下）」『医学図書館』三巻三・四号、一五二～一五四頁、五・六号、一六二～一六四頁、一九五六
(47) 阿部龍夫『函館郷土手帳』六三～八二頁、無風帯社、函館市、一九五七
(48) 阿部たつを「中川五郎治顕彰に就て」『松前史談会報』六四号、頁なし、一九六三
(49) 松本　隆「我が国で種痘の先鞭をつけた中川五郎治について―その埋葬地は松前城下である―」『松前史談会報』六八号、一九六三
(50) 小川鼎三「日本の医学史から（九）―種痘の伝来―」『日本医事新報ジュニア版』二五号、九～一〇頁、一九六四
(51) 小川鼎三「日本の医学史から（一五）―補遺と訂正―」『日本医事新報ジュニア版』三一号、九～一〇頁、一九六四
(52) 村山七郎「日本最初の牛痘法文献の原書」『順天堂医学雑誌』一一巻二号、一〇九～一一六頁、一九六五
(53) 村山七郎「『遁花秘訣』原書の和訳（一）」『順天堂医学』一一巻四号、九七～一〇三頁、一九六六
(54) 村山七郎「『遁花秘訣』原書の和訳（二）」『順天堂医学』一二巻一号、一〇二～一〇七頁、一九六六
(55) 松木明知「中川五郎治の種痘法」『日本医事新報』二一六三号、四三～四四頁、一九六五
(56) 小川鼎三「種痘法の伝来とお玉ケ池種痘所」『学士会報』六九二号、七～一一頁、一九六六
(57) 松木明知「中川五郎治の系譜」『蘭学資料研究会研究報告』一八三号、一～七頁、一九六六
(58) 阿部龍夫「中川五郎治の種痘法」『北海道地方研究』六三号、六～一一頁、一九六七
(59) 松木明知「中川五郎治の系譜―続―　―諸寺院過去帳に基づく中川家の系図―」『蘭学資料研究会研究報告』一九〇号、一～七頁、一九六七
(60) 松木明知「『白鳥雄蔵種痘之書』について―中川五郎治の種痘法に関連して―」『日本医史学雑誌』一三巻一号、五四～六〇頁、一九六七

(61) 松木明知「中川五郎治と中川家の塋域」『蘭学資料研究会研究報告』一九一号、一～九頁、一九六七
(62) 松木明知「ロシアにおける牛痘種痘法の起源―中川五郎治の種痘法に関連して―」『日本医史学雑誌』一三巻二号、四五～四九頁、一九六七
(63) 松木明知「中川五郎治関係文書そのほか」『蘭学資料研究会研究報告』一九九号、一～九頁、一九六七
(64) 松木明知「中川五郎治に関する最近の知見」『日本医史学雑誌』一三巻三号、二六～三二頁、一九六七
(65) 松木明知「白鳥雄蔵と白鳥家の塋域」『日本医史学雑誌』一三巻三号、三三～三七頁、一九六七
(66) 武茂（むも）信雄「臼井偵庵の種痘―大館の医師だった―」『秋田魁新報』一九六七年一二月五日
(67) 吉成直太郎「秋田におけるロシア伝来の種痘法」『日本医史学雑誌』一四巻一号、四四～四七頁、一九六八
(68) 小川鼎三、酒井シヅ「遁花秘訣（二種）と魯西亜牛痘全書と村山七郎訳ロシア原書の内容の比較」『日本医史学雑誌』一四巻一号、一一九～一二二頁、一九六八
(69) 松木明知「青森県における種痘の歴史」『日本医史学雑誌』一四巻一号、一～四頁、一九六八
(70) 松木明知「秋田種痘史に関する一史料―白鳥雄蔵の種痘法―」『蘭学資料研究会研究報告』二一二号、一～一三頁、一九六八
(71) 松木明知「中川五郎治の系譜―追補―」『蘭学資料研究会研究報告』二一六号、一～六頁、一九六八
(72) 北海道総務部行政資料室『開拓の群像（下）』二四二～二四七頁、北海道庁、札幌市、一九六九
(73) 飯田吉次郎「中川五郎治と郷土の牛」大野役場『大野町史』四八〇～四八二頁、大野町、一九七〇
(74) 鳴海健太郎「日本における種痘の鼻祖中川五郎治」『月刊あおもり』二巻三号、二四～二七頁、一九七〇
(75) 松木明知「『魯西亜牛痘全書』の書誌学的研究（一）」『蘭学資料研究会研究報告』二三〇号、一～五頁、一九七〇
(76) 松木明知「松前藩医桜井小膳の塋域」『日本医史学雑誌』一六巻四号、四八～五四頁、一九七〇
(77) 松木明知「『魯西亜牛痘全書』の書誌学的研究（二）―武田本「遁花秘訣」写本Cについて―」『蘭学資料研究会研究報告』二三四号、一～一一頁、一九七〇
(78) 松木明知「種痘法の移入と弘前藩の態度」『日本医史学雑誌』一六巻三号、四四～五〇頁、一九七〇
(79) 松木明知「『魯西亜牛痘全書』の書誌学的研究（三）―狩野本「遁花秘訣」について―」『蘭学資料研究会研究報告』二四三号、一九～二五頁、一九七一

(80) 松木明知「中川五郎治覚え書」『東奥文化』四二号、一七～一九頁、一九七一
(81) 松木明知「秋田藩医斎藤養達―とくに白鳥雄蔵との関係―」日本医史学雑誌 一七巻 二号 一一一～一一七頁 昭和四六年（一九七一）六月
(82) 木崎良平「安芸の久蔵の『魯斉亜国漂流聞書』」『鹿児島大史録』四号、一五三～一八〇頁、一九七一
(83) 木崎良平「ロシアへの漂流民久蔵の墓―日魯関係史話（その四）―」『鹿児島大史録』四号、一八一～一八四頁、一九七一
(84) 安井 広「『遁花秘訣』の一写本について」『日本医史学雑誌』一七巻一号、二五～二六頁、一九七一
(85) 阿部龍夫「種痘事始」『嗜好 別冊ベビーブック（明治屋）』第三号、三四～三九頁、一九七一
(86) 吉村 昭『日本医家伝』一三一～一五二頁、講談社、東京、一九七一
(87) 小川鼎三 酒井シヅ「近代医学の先駆―解体新書と遁花秘訣―」広瀬秀雄、中山茂、小川鼎三校注『日本思想大系（六五）洋学（下）』五一三～五二五頁、岩波書店、東京、一九七二
(88) 松木明知「『魯西亜牛痘全書』の書誌学的研究（四）―国会本「遁花秘訣」について―」『蘭学資料研究会研究報告』二五五号、一～七頁、一九七二
(89) 杉本つとむ「『遁花秘訣』とその翻訳―わが国最初のロシア書の翻訳」『初源』二号、二四四～二三二頁、一九七一
(90) 杉本つとむ「『遁花秘訣』とその翻訳―わが国最初のロシア語書の翻訳―」『武蔵野女子大学紀要』七号、一～一三頁、一九七二
(91) 北海道総務部行政資料室『北海道開拓功労者関係資料収録（下）』一八～一九頁、北海道庁、札幌市、一九七二
(92) 藤野恒三郎「種痘法の今と昔（七）中川五郎治と牛痘種痘」『診療と保険』一五巻三号、一九二～一九三頁、一九七三
(93) 藤野恒三郎「種痘法の昔と今（八）中川五郎治の牛痘種痘と秋田藩」『診療と保険』一五巻六号、七五六～七六一頁、一九七三
(94) 松木明知『北海道の医史』津軽書房、弘前市、一九七三
(95) 松橋栄信「種痘」『秋田魁新報』一九七三年一月一八日
(96) 楠美鉄二『あっぱれ五郎治―蝦夷地警固と青森県―』東奥日報社、青森市、一九七四
(97) 吉村 昭（参考）『北天の星（上・下）』講談社、東京、一九七五
(98) 木崎良平「中川五郎治に関する文献―日魯関係史雑話（その八）―」『鹿児島大史録』八号、一八一～一八三頁、一九七五

(99) 加藤九祚「中川五郎治の見たシベリア諸民俗」『国立民族博物館研究報告』一巻一号、一五二〜一五八頁、一九七六
(100) 花山寛美「牛痘接種のはじめ」『日本医事新報』二八一五号、六二〜六三頁、一九七八
(101) 吉村　昭「口を寄せてチウ…と云ふ也—中川五郎治について—『北海道取材ノートから』（一〇）」『月刊ダン』一〇月号、一四八〜一五〇頁、一九七九
(102) 吉村　昭「水鉄砲外科のこと—中川五郎治について—『北海道取材ノート』から（一一）」『月刊ダン』一一月号、一四八〜一五〇頁、一九七九
(103) 吉村　昭「天下の一大事—中川五郎治について—『北海道取材ノート』から（一二）」『月刊ダン』一二月号、一四八〜一五〇頁、一九七九
(104) 切田未良『私の見た佛たち—過去帳を訪ねて—』一六九〜一七六頁、あづま書房、仙台市、一九七九
(105) 小竹英夫他編『北海道医師会史一九七九』北海道医師会、札幌市、一九七九
(106) 浦上五六『愛の種痘医—日本天然痘物語—』恒和出版、東京、一九八〇
(107) 石田秀一『秋田の医史』一二〜二〇頁、私家版、一九八一
(108) 蒲原　宏、藤井宣正「中川五郎治の種痘に関する小史料—新潟で発見された北方系種痘資料紹介—」『日本医史学雑誌』二七巻三号、二二八〜二二九頁、一九八一
(109) 吉村　昭「北天の星—中川五郎治の事跡—」『順天堂医学』二八巻四号、五三八〜五四四頁、一九八二
(110) 松木明知「中川五郎治の種痘法の研究—新たに発見された被接種者—」『日本医史学雑誌』二九巻一号、三五〜四一頁、一九八三
(111) 吉村　昭『万年筆の旅（作家ノートⅡ）』（文春文庫）二四〇〜二六五頁、文芸春秋社、東京、一九八六
(112) 添川正夫『日本痘苗史序説』二五〜四二頁、近代出版、東京、一九八七
(113) 木村一郎「我が国で最初に種痘をした中川五郎治の牛痘苗入手についての一考察」『免疫薬理』七巻二号、二〇三頁、一九八九
(114) 松木明知編『北海道医事文化史料集成（上）』岩波ブックサービスセンター、東京、一九九〇
(115) 松木明知編『北海道医事文化史料集成（下）』岩波ブックサービスセンター、東京、一九九〇
(116) 松木明知『北海道医事文化史料集成（続）』岩波ブックサービスセンター、東京、一九九一

(117) 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開V―翻訳の方法に関する研究 資料 総牽引―』七一～一〇八頁、早稲田大学出版部、東京、一九八二
(118) 杉本つとむ『長崎通詞ものがたり』二一一～二四七頁、開拓社、東京、一九九〇
(119) 杉本つとむ『江戸の翻訳家たち』一四五～二〇九頁、早稲田大学出版部、東京、一九九五
(120) 鈴木喜代作『オロシア雪原の逃亡者―日本にはじめて種痘法をもちこんだ男―』PHP研究所、東京、一九九二
(121) 秋月俊幸「五郎治申上荒増」解説 北海道出版企画センター、札幌市、北方史史料集成編集委員会「北方史史料集成」第五巻、三～二二頁、一九九四
(122) 中尾英雄『江戸の疱瘡医―池田京水とその一族』一六〇～一六二頁、私家版、一九九五
(123) 左近 毅 河合忠信「楽亭（松平定信）文庫 旧蔵『魯西亜噺本』―解説と翻刻―」『ビブリア』一〇五号、八一～一三三頁、一九九六
(124) 大島幹雄『魯西亜から来た日本人―漂流民善六物語―』広済堂出版、東京、一九九六
(125) 松木明知「馬場佐十郎訳『魯西亜牛痘全書』の刊行年について」『科学医学資料研究』二七〇号、六～一二頁、一九九七
(126) 松木明知「牛痘種痘法の鼻祖中川五郎治に関して誤って伝えられていること」『日本医史学雑誌』四四巻二号、五～七頁、一九九八
(127) 松木明知編『中川五郎治書誌―本邦種痘法の鼻祖―』岩波ブックサービスセンター、東京、一九九八
(128) 左近 毅「日本人のシベリア認識―『五郎治申上荒増』をめぐって―」『人文研究・大阪市立大学文学部紀要』五一巻、六二一～六六八頁、一九九九
(129) 谷沢尚一「中川五郎次の晩年」『北辰』二号、三～一一頁、一九九九
(130) 松木明知「中川五郎治顕彰の碑」アップルハウス編『続々日本の医史跡二〇選』一二～一五頁、バイエル薬品株式会社、東京、一九九九
(131) 北海道古文書解読サークル『解読 五郎治申上荒増（全）』（古文書解読叢書一）、札幌市、一九九九
(132) 松木明知「馬場貞由訳『遁花秘訣』の新研究―村山七郎による現代語訳の訂正―」『科学医学資料研究』三一四号、一～一五頁、二〇〇〇
(133) 犬山征夫「種痘を開発したジェンナーと我が国で初めて種痘を行った中川五郎治」『JOHNS』一六巻一一号、

一七九二～一七九九頁、二〇〇〇

（134）松木明知「中川五郎治がシベリアから将来したロシア語牛痘種痘書についての一考察」『科学医学資料研究』三〇巻二号、九～三六頁、二〇〇二

（135）吉村　昭『歴史の影絵』（文春文庫）三五～五三頁、文芸春秋社、東京、二〇〇三

（136）切田未良『過去帳―永遠に生きている名の発見―』一八四～一九二頁、日本橋丸善出版センター、東京、二〇〇三

（137）泉　秀樹「種痘の種を蒔く―中川五郎治の数奇な生涯―」『レター』（私学共済組合広報誌）三四巻、一四～一五頁、二〇〇三

（138）胡谷（えびすだに）真「天然痘のワクチンをロシアから伝えた漂流民の久蔵」『続日本のなかのロシア』五四～五五頁、東洋書店、東京、二〇〇三

（139）松木明知「シベリアで牛痘種痘術を学んだ中川五郎治の数奇な運命」『医歯薬アカデミーＮＥＷＳ』九号、五～六頁、二〇〇五

（140）片倉正晴「種痘法をロシアから持ち帰った中川五郎治」『続々日本のなかのロシア』六〇～六三頁、東洋書店、東京、二〇〇五

（141）ＳＴＶラジオ編『ほっかいどう百年物語』（第六集）一三四～一四五頁、中西出版、札幌市、二〇〇五

A Review of Biographical Studies on Goroji Nakagawa, a Japanese Pioneer of Jennerian Vaccination

Akitomo MATSUKI

The first detailed biographical study of Goroji Nakagawa, a Japanese pioneer of Jennerian vaccination, dates back to 1885, when Yotoku Onuki wrote his paper on Nakagawa after his field survey in the Matsumae district. Since then information about him gradually began to be compiled by medical historians as well as local historians. Tatsuo Abe, a pediatrician, studied about Nakagawa in depth to publish a monograph entitled "Goroji Nakagawa and the Introduction of Vaccination" in 1943, on the 120th anniversary of the first trial of vaccination by him. This marked a great progress in the biographical study of Nakagawa.

At the beginning of the 1960s Sichiro Murayama of Juntendo University identified one of the two Russian books that had been brought back by Nakagawa from Siberia and he translated it into modern Japanese. At that time the author made extensive bibliographical studies on various manuscripts of "Tonka Hiketu," a classical Japanese translation of the Russian book by Sadayosi Baba in 1820. The author also made a wide field survey on burial records and gravestones of the Nakagawa's family at Matsumae and Kawauchi where Nakagawa was born and died, and elucidated that Nakagawa was buried at Hogenji temple at Matsumae.

The most recent advance was observed in the beginning of the Heisei period, when the author edited and published three volumes of "Hokkaido Iji Siryo Shusei" (Collected Papers on Medical Culture in Hokkaido) in which almost all the papers and manuscripts concerning Nakagawa which would be very beneficial for investigators were reproduced.

During the past 120 years since 1885 numerous educational and medical historical papers about Nakagawa have appeared for the public as well as medical historians; however, most of them have conveyed incorrect information of his biography, resulting from repeated citation of inadequate and erroneous references.